

すべてを神にまかせよ

ルカによる福音書20:1-8

20:01ある日、イエスが神殿の境内で民衆に教え、福音を告げ知らせておられると、祭司長や律法学者たちが、長老たちと一緒に近づいて来て、20:02言った。「我々に言いなさい。何の権威でこのようなことをしているのか。その権威を与えたのはだれか。」20:03イエスはお答えになった。「では、わたしも一つ尋ねるから、それに答えなさい。20:04ヨハネの洗礼は、天からのものだったか、それとも、人からのものだったか。」20:05彼らは相談した。「『天からのものだ』と言えば、『では、なぜヨハネを信じなかったのか』と言うだろう。20:06『人からのものだ』と言えば、民衆はこぞって我々を石で殺すだろう。ヨハネを預言者だと信じ込んでいるのだから。」20:07そこで彼らは、「どこからか、分からない」と答えた。20:08すると、イエスは言われた。「それなら、何の権威でこのようなことをするのか、わたしも言うまい。」

「初心忘るべからず」(世阿弥)と言います。信仰も同じであります。私は、牧師になって30年ですが、今分かったことは、自分の信仰生活は、洗礼を受ける前、初心者の頃が一番だったということです。当時は毎日一章ずつ聖書を読み心を込めて主の祈りを祈る、そんな毎日でした。その頃の私は、自分に絶望していました。苦しくてたまらなかった。聖書には世の中の誰も教えてくれないことが書いてありました。それは自分に絶望してよい、その方がよい、その分神様に頼らざるを得ないのだから、ということです。私は自分が罪人だという、魂の本音に立ち返って、初めて救われたのです。今思い返すと、初心者の方の方が神に近かったと反省しています。信仰には、初心者よりも年数を経た人のほうが優れているなどということはありません。イエス様も「先のものが後になり、あとのものが先になる。」と言っておられます(マルコ10:31)。「初心忘るべからず」です。

エルサレム入りしたイエス様を迎えたのは喜ぶ民衆ばかりではありませんでした。祭司長、律法学者、長老たち、彼らは初心者ではありません。その道の玄人です。彼らは、イエスに質問します。2節、「我々に言いなさい。何の権威でこのようなことをしているのか。その権威を与えたのは誰か。」挑戦的な質問です。これでは口頭試問です。答えが知りたいのではありません。自分たちは正統派だ、専門家だ、権威者だという自負があります。ガリラヤという田舎からやってきたイエスの素人集団が、民衆の支持を得ているとはいえ、神殿にやってきて勝手な振る舞いをしていることに戸惑いと、そして怒りすら感じたのかもしれませんが。前節からも分かるように、すでに彼らはイエスを殺すことを決めていました。

イエス様はイスラエルが待ち望んだメシア、救い主でした。祭司長、律法学者、民の長老は、救い主を待ち望むというイスラエルの伝統を担っている人々です。その待ち望んだ救い主がやってきたのに、どうして彼らは認めることができなかったのでしょうか。イエス様の説教に「羊は羊飼いの声を聞き分け、ついて行く。盗人が来ても、ついて行かず、逃げ去る。」という内容の言葉があります(ヨハネ10:1-6)。羊は日ごろから自分を養い守ってくれる人を、自分を愛してくれる人を知っているのです。私たちも同じです。民衆はバプテスマのヨハネが来たとき、そしてイエスが来たとき、神様の権威を感じ取りました。日々祈り、神様の愛に行かされる生活をしていたからこそ、イエス様やバプテスマのヨハネに同じような質の神の愛を感じたのです。

バプテスマのヨハネが現れて、厳しい裁きを預言し悔い改めを迫ったとき、人々は何と言ったのでしょうか。「では、わたしたちはどうすればよいのですか。」同じ質問でも祭司長たちの質問とは大違いです。私は自分の罪を前にしてどうしたらよいか分かりません。途方に促されています。本当に答えが知りたい。これです。これが信仰の原点です。自分は何も知らないという前提、ただ神の愛

によって生かされるほかないものであるという前提、これがあつたから、人々は本物を見分けることができました。

祭司長・律法学者・長老たちは権威者でした。権威者というのは何でも知っている人達です。途方にはくれています。救いの道を知っていると自認している人たちです。でも本当は知らなかった。イスラエル民族を神が得ればれた理由、いわばイスラエルの原点が申命記7:7-8に書かれています。

07:07主が心引かれてあなたたちを選ばれたのは、あなたたちが他のどの民よりも数が多かったからではない。あなたたちは他のどの民よりも貧弱であつた。07:08ただ、あなたに対する主の愛のゆえに、あなたたちの先祖に誓われた誓いを守られたゆえに、主は力ある御手をもってあなたたちを導き出し、エジプトの王、ファラオが支配する奴隷の家から救い出されたのである。

神様はご自分の愛と栄光を輝かせるために、弱く貧しく愚かな罪人である人々をあえて選ばれたのです。不可能を可能にし、無から有を呼び出される神、その素晴らしさをあらわすことができるのは、最も弱く貧しく愚かな者たちです。これがイスラエルの原点です。祭司長たちは、この原点を忘れたのです。

私が尊敬する牧師の話です。その方が牧師になったとき、その方お母さんが就任式で言いました。この子が「先生」と呼ばれるようになろうとは思ひもよらなかった。なぜって、小学校の成績は「一」か「二」だったので。これは牧師の原点です。「成績が」ということではありません。どの牧師も、何がしか自分の欠点や弱さをもっています。しかし、キリストのゆえにそれを誇る事ができる。それが牧師の資格ではないかと私は思います。

さて、詩編にはこんな言葉があります。「不運な人はあなたにすべてをおまかせします。」(詩編10:14)またこうもあります。「主はわたしのために／すべてを成し遂げてくださいます。」(詩編138:8)自分が不運だと思ふ人は楽しみにしましょう。神様の業が現れるのを。困難を目の前にして気落ちしている人は安心してください。それを成し遂げるのは、あなたではなく神様だからです。すべてをまかせよ。これが原点です。